

「民族自治」における内モンゴル自治区

内モンゴル自治区は一九四七年五月一日に自治政府として成立し、その後、他の自治区とともに中華人民共和国の歴史を共有してきた。経済体制改革が進み市場経済時代へと移行する中で、内モンゴル自治区の「自治」と「共治」の位置づけはどのように変化していくのであるうか。国際関係史、政治学、言語学、人類学の視点から討論する。

中見立夫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授） × フフバートル（昭和女子大学講師） × 加々美光行（愛知大学現代中国学部教授） × 高明潔（愛知大学現代中国学部助教授）

一 「民族自治」から見る

「内モンゴル自治区」

加々美 一九二二年中国共産党は二全大会で民族に関する積極政策を展開し、初めて民族自決権を認める民族政策を出しました。当時はソ連と中国の国境の領土問題は、中華民国つまり国民党政権とソ連の間の問題でしたから、共産党の立場から言えば、むしろ国民党に対する対抗から自決権を強く主張するという政治的

な配慮が働いたと考えられるわけです。

その後紆余曲折を経て、日本敗戦後二年の一九四七年、国共内戦勃発から約一年後の時期、連合政府論が毛沢東によって出された時期で、この政策が逆転します。連合政府という考え方からいつて独立を容認する自決権については当然否定になる。それを象徴するかのよう一九四七年成立した内モンゴル自治政府は民族自決権を事実上否定する形で、最初に民族区域自治のモデル政府として登場

したわけです。

もとをただせば、現在のモンゴル国地域（いわゆる外モンゴル）では、一九二一年にソヴェエト赤軍の軍事介入で人民革命がおこり、二四年にはモンゴル人民共和国が誕生しています。その影響のもと、内モンゴルでも内モンゴル人民革命党、のちに「内人党」と呼ばれた分離主義の傾向を持った政党が現れますが、「国共合作」の破綻で崩壊します。戦後に再び「内モンゴル人民革命党」という名

州なりの地方自治への政治参画が認められるのですね、民族独自の特定の空間、区域への自治は認められないけれども、社会的集団としての民族として地方自治への参画を認めるという形で自治権を一定程度認める。この場合はですから、独自の区域が特定されないという意味で区域自治とは呼ばないわけで、実質的に中国の民族区域自治政策というのはそういう二本立てで進んできたと大体考えられるわけです。

ところが、その二本立てで進んできたことの背後に今日どういう問題が発生してきたかといえますと、簡単に言いますと、区域に関する内向きの自主統治の考え方が非常に強く現れてきた結果、一方で諸民族間の連携、あるいは特定の民族区域自治の区域をこえた、他の民族地域との連携による共同参画への意欲が弱まってきている。また他方では同時に中央への経済的、財政的な依存性。中国の民族学の学界で最近強調されている問題とし民族区域自治自身に必然的に自治に伴う排他性と同時に依存性が現れる、

中国語では「依附性」というのですが、あるいは従属性といつてもいいですね。それが強くなつてきているという議論が多い。区域自治を越えた区域自治間の連携は、一般により高いレベルの国政への参画を呼び起こすわけですが、そうした国政への参画意欲が減退し、その反面、中央への依存性が強くなるというわけです。

問題は新疆ウイグル自治区にせよ、寧夏回族自治区にせよ、広西チワン族自治区にせよ、その民族構成はウイグル族だけではない、あるいは回族だけではない、チワン族だけではない、それ以外の多くの民族が存在している。したがって例えば新疆の場合、そこには本来ウイグルの名を冠した区域自治といってもウイグルのみが居住している区域ではなくて、キルギス、タタール、カザフ等の他の民族も居住している区域なわけですね。ということは、諸民族の壁を横断する統治が各民族自治区のレベルでもともと成立しているのですから、本来区域自治の区域概念は相対的な概念であるべきなのに、

非常に強固な内向きの境界線をもつてきて、その結果今言つたような排他性や依存性が強まっているという、これが一部の、学界全体ではなくて、学界の一部理論として現れている。

現在生じつつある排他性と従属性は民族区域自治の本来の理念に反するというわけです。さつき言いました民族区域自治以外の一般の県や州に雑居散居している民族の場合には、チベット族であれ、イ族であれ、その民族的な社会集団の利益、つまり自己の民族集団の利益のみの排他的利益を要求するのではなくて、行政的な区画である県、州の地域全体の利益に共同に参画する形をとっている。民族区域自治はそうした民族自治の共同参画の理念とセットで定義されたということです。ところが区域自治と民族自治の両方の関係が徐々に切断されてきて、民族区域自治が独り歩きし、その排他性が非常に強まってきた。雑駁に言えば、民族区域自治における政治的独立への志向が強まって、今のまま行けば、民族区域自治はかなり大きな問題を孕んで来るとい

うそういう危機感が生まれている。

例えば内モンゴル自治区の場合、ご存知のように人口比率でモンゴル民族の比率が現状で約一六%、実数にして区域全体で二二六三万人中、モンゴル民族の人口が三三五万人（一九九六年統計）ですが、人口比は徐々に一〇%に近づいてきているのです。そうすると、内モンゴル自治区の中ですらモンゴル人は民族集団としての利益を排他的に追及するとすればいろんな困難に遭遇するわけで、区域の利益とモンゴル民族の民族集団独自の利益と、両者の間に一定の矛盾が発生している。

まず第一点は、もともと民族自治区という政策の持っていた大きな盲点といえますか、ある意味で弊害であったかもしれないのですが、地域が主体となるのであって、民族が主体となるのではないという。だから新疆というのは先に地域がきてそのあとにウイグルという民族名が来る。内モンゴルのみ例外ですが、他の場合は同じですね。広西チワン族の場合も、寧夏回族の場合も、寧夏、あるいは

広西という地域が先に来てその後に民族名が来る。実際は内モンゴルの場合にも、「内モンゴル族」と呼称しない「族」抜き「内モンゴル」の概念は「外モンゴル」との対比でいう地域概念に過ぎないという主張もあるわけです。原則的には地域が優先であって民族がその後に来るという考え方があるものですから、当然内モンゴル自治区に関して言えば、内モンゴル自治区全体の地域としての利益が優先されて、モンゴル人、モンゴル族という民族集団の利益はその後に来るといふふうに考えられている。そうすると、モンゴル人から言えば内モンゴル自治区と呼んでいてモンゴル民族主体の自治区のはずなのに、モンゴル民族の利益というものが十分発現できないという政治的不満が非常に強まってくる。

こうした事態について、中国の民族学界の議論、後で誰がどう言っているかというのを申し上げますけれども、学界の中に現れている議論は、例えばモンゴル族の強い不満を指して排他性と呼んでいるわけです。しかもこの排他性は、さっ

き申しました中央への依附性、従属性を強める。自治といいつつ、中央から民族自治区域へのより多くの支援を求めるという従属性を却って強めるということがここで問題になってきている。モンゴルだけでなく、新疆ウイグルの場合ももちろんそうですし、チベット自治区の場合もそうです。例えばチベットであれば、漢民族がどんどん入ってくる、そのことによつて民族主体としての利益が大きく損なわれる。つまり、地域全体の利益ではなくて、チベット族という民族的主体の排他的利益が非常に強く主張されてしまう。それへの批判がまず第一点として見られる。

今の議論をまた跡付けるために強く主張されているのがグローバリズムです。グローバリズムが今日非常に強まってきている中で、例えばNation Stateの考え方が強く反省を迫られてきている。そういう状況下で区域を一つの単位とした区域自治の下で民族主体の排他的利益が主張されることは、Nation Stateをこえた地球的な利益が要請されるグローバリズム

の流れ、方向性に逆行しているという主張も現れているわけです。僕はどちらかというと中国の政策立案者の内部、あるいは学界内部に現れている新しい理論的方向性、政策的方向性、の中の問題がありそうな部分を強調して今申し上げているので負の面を少し強調しすぎた感がありますけれども、一応そうした議論が登場しつづけるということを前提に、どうお考えになるか、みなさんのご意見を伺いたいと思います。

中見 モンゴル人にとって「自治」ということばがどうとらえられたかについて、まずお話ししましょう。

近代的政治概念としての「自治」とは、ひとつの国家のなかで中央の統治に対する、国家を構成するそれぞれの地域の自主的な権限の行使をさすと思います。わたくしは、歴史学者なので、モンゴルの流れのなかで「自治」的状况をみてみますと、もちろん清朝時代においても、清朝中央政府に対するモンゴル各旗の自治的状况というものは存在しておりまして。しかし、近代的な意味での「自治」

という概念に直面せざるを得なかったのは一九一一年の独立宣言以降であったと思います。当時のハルハ・モンゴルは独立をしようとした。それから今の内モンゴル自治区の領域のなかでも、ホロンバイルなどではハルハの動きに連動して独立しようとした。

このときのモンゴル独立の動きについては、いまでも中国の学界では、ロシアの陰謀だと言いますけれども、当時のロシア帝国はモンゴルを独立させようなんて思ってもいなかった。そこへ出てくるのが「自治」という問題です。漢語の「自



中見立夫[Nakami Tatsuo]

治」という語彙は、ヨーロッパ諸語から日本語を経由して入ったもので、英語では「オートノミー」(Autonomy)です。

一九一二年のロシア・モンゴル協定交渉のときに、初めて問題として浮上します。その「自治」という概念が、どのようにモンゴル語のなかに入ったか。そこからもう問題が生じております。もともと日本の「地方自治」をめぐる論議では、日本のどこかの地域が日本国から離れるなんてことは全然想定していない。ところが「自治」という問題にエスニックな要素が絡まると、ある一つの国家から離脱する、ないしは離脱しないまでも距離を置くという方向性が出てくるわけです。モンゴル問題に出てくる自治とは、離脱は認めないが、高度な政治的自由を認めるという問題であったのです。

興味深いこととして、一九一二年のロシア・モンゴル協定には、ロシア語とモンゴル語と両方のテキストがあります。モンゴル語のテキストは、漢語の「自治」という意味を、「自ら治める」と分解しモンゴル語では表記しています。これに対

してロシア語のテクストは「アウトノミーヤ」(Автонмия)という近代的政治概念を使っております。一九一五年のキャフタ協定では、外モンゴルの高度自治と同時に外モンゴルに対する中国の宗主権が承認されます。キャフタ協定の正文はフランス語テクストですので、まさに Autonomy になるわけですし、モンゴル語テクストでも、そのまま「アウトノミーヤ」と表記しております。

一九二〇年代以降のモンゴル人における「自治」という問題を追ってみますと、結局「自決」と「自治」のあいだにはかなり開きがあるわけです。ハルハ・モンゴルの人たちは、紆余曲折があるけれども二一年の人民革命のあと、二四年にモンゴル人民共和国を樹立いたします。いや、二一年人民革命だって初めは自治の復興ということがスローガンです。ソヴィエトやコミンテルンのモンゴル政策をみて、二〇年代前半では、対中国政策とも絡んでいて、必ずしもモンゴル人民共和国を独立国家として維持していくことに確信があったわけではありませ

ん。二八年の「国共合作」が破綻するのと、外モンゴルを完全に中国と切り離し独立国家として育成することが、ソヴィエトの方針となります。このようなモンゴル人民共和国の不安定な位置は、戦後になつて解消されるわけですね。

やはり、モンゴル人にとつての「自治」というものは、基本的には「自決」を求めながらも、完全な離脱、つまり独立というものが否定されたときの問題となります。つまり自治といつたつて、日本に言う地方自治とは次元が違います、そこにいわゆる民族自治というものの問題がある。

具体的には、中国という、フレームを認めたいという問題。さきほど加々美先生が言われた、区域というものを見ながら、だけど主体が地域になつて次に民族が来てしまう。日本の影響力があつた時代でもそうで、三二年に成立した満洲国は形式的には独立国家ですが、実際は日本の傀儡国家です。そこでモンゴル人の「自治」という問題を認めざるを得ないというところで興安省を設置するわけです。

それから内モンゴル西部の方でいわゆる自治運動が広がります。これは南京政権に対するモンゴル民族の政治的自決権の主張です。徳王たちが推進し、それに日本軍が目をつけた。結果として、蒙古連合政府が成立しますが、今日の内モンゴル地域は、満洲国と蒙古連合政府に分断されております。

今の中国において徳王に対する評価は、もちろん公式には日本の傀儡だということですが、一般のモンゴル人の評価というものは非常に微妙なところがあります。あなたが徳王個人のことを否定はできないわけです。だから完全な漢奸とは違うわけですね。今でも彼に対するシンパシーというものはそれなりにありますね、徳王自体は悪くないと。だからといって徳王個人に対する評価と蒙古連合政権への評価というのは、これはよくいつもモンゴル人の若い学生さんに言いますが、異なる問題です。蒙古連合政権というのは本質的に日本の傀儡国家です。徳王自身は内モンゴルの自決と統合を夢みていたかもしれない。しかし日本軍の

意向によつて、華北の傀儡政權と合併することにより、蒙古連合政府が組織されますが、住民の多数は漢人となります。また満洲国のモンゴル地域を統合することもできない。

戦後になつて、中国のなかでモンゴル人の自治運動が盛り上がりますが、結果的に、オランフ（ウランフ、烏蘭夫）らの指導によつて、四七年に内モンゴル人民政府が樹立されます。中国共産党体制下での区域自治の雛形という形でできますが、だがここで非常におもしろいと思うのは、逆にいうと内モンゴルといういわば区域を統合した、あるいは再統合したというのは、これはまさに中共による政治指導によつておこなわれたという事実です。今では『内モンゴルの歴史』という本すら出版されていますが、内モンゴルという地域の形成はまさにオランフの率いる中国共産党によつて達成された。しかも内モンゴル大学の金海君が研究しているように、初めのうちモンゴル自治区の領域というのはいささいで、数年をかけて今日の内モンゴルとい

う区域が形成されています。

高 そうでしょうね。『内モンゴル自治区史』によれば、全体としては五五、五六年までのようです。五五年二月末に開催された「中国人民政治協商會議第一期内蒙古自治区委員会第一會議」がそのしるしだと思われます。また、五五年七月に開催された「全国人民代表大會二期二回會議」の決定によつて、「熱河省」を取り消し、「熱河省」に区画されていた「昭烏達盟」（現在赤峰市）などの地区は内モンゴルに返還されました。その後の五六年四月では、甘肅省の「バインホト蒙古族自治州」と「エジナ蒙古族自治旗」も内モンゴル自治区に区画されました。これらの返還や区画によつて内モンゴル自治区の統一が最終的に実現されたと記録されています。

中見 そのようです。それまでの省を解体して「地域」という形で「内モンゴル」を形成する。もちろん清朝時代においても内蒙東西六盟四九旗という枠組みは存在しています。そして外モンゴルも含めた形で、モンゴル地域は理藩院の統治の

なかにありました。だけど内モンゴルという地域が誕生するのは四九年以降の現象です。しかもそのなかで区域自治といたつて、区域が先で民族は後であるというのはさうですけどね。

四〇年代のモンゴル自治運動と自治政府樹立に参加したモンゴル人はまだかなりいるわけですが、そういう方々のお話を聞くと、今の内モンゴル自治区のような形態を想定していたわけではなくて、もう少しモンゴル人が主体的であつたはずだけれども、やはりそれは数の力とさまざまな要因のために、今日のような結果となつたといわれます。自治区を作ろうとしたときの意図は結果と異なり、モンゴル人側のリーダーシップはもう少しあつたでしょうね。

それからもともと民族といつても、民族というものが極めて近代的な概念であつて、何をもつて民族というのかは難しい問題があります。要するに、現在の中国における民族識別なるものは、きわめて単純で、漢民族ではない人は、なんらかの根拠があれば何々族になれるで

しょう。何々族と申告できない人は結局漢民族です。内モンゴル自治区だって、「モンゴル族」と自己申告した人の数をさすと一六%くらいだというけれども、そこでモンゴル族とはどういう人なのかというと、非常に難しい問題です。

もともと内モンゴル自治区の領域でモンゴル人がリーダーシップをとってやるかといえば、そうでもないわけで、それが区域自治なるものの特性です。一体どういう状態が理想的であるのか。果たしてあのモンゴル国のモンゴル人と内モンゴルのモンゴル人とが統合して国家を作ったとしても、一種の感情的レベルでは充たされるかもしれない。しかし単純に合併したところで、本当にそこに人間の幸せというものはあるのだろうかと思えます。しばしば、「民族」とはアイデンティティの問題、つまりわれわれ意識の問題といわれます。

しかしアイデンティティは、つねにひとつとは限らない。場所と状況によって変わるわけで、民族というのは一種のフィクションであるわけですが、一方い

わゆる漢民族というものは、これまた実態が不明です。何をもって漢民族かということは、これこそ分らない。つまりモンゴル人は何かと問うことは、裏返すと漢民族は何かという問題になってきてしまいます。常に。マイノリティというアイデンティティはあるけれども、問題はそのアイデンティティのあり方、それから実態ですね。ただ、内モンゴル自治区では八一年くらいに初めて行ったところから比べると、町ではモンゴル語がむしろ通じるようになった面もあります。モンゴル族とその民族自治というけれども、そこにおける自治の内容ですね、それが何なのかということですね。

加々美　　そうですね。中見さんから出された問題をちよつとだけ補足しますと、アイデンティティの問題では、地域意識とか地方意識は、私は「北京人」ですとか、「上海人」、「四川人」、「湖北人」というふうに、漢民族の間では非常に地域、あるいは地方とアイデンティティが重なるのですね。ところが新疆ウイグルでも寧夏回族でもいいのですけ

ど、回族が、私は「寧夏人」ですと言うだろうか、そういう地方的なアイデンティティが強いかというとやはりそうは言えない。例えば内モンゴルでも「内蒙人」という言い方をモンゴル人が自分ですることはまずありませんので、言うときはやはり私はモンゴル族だと言うのですね。新疆も同じです。

基本的に区域自治という場合に、民族が特定地域に集中し集居しているような地域で区域自治が成立したとしても、区域によるアイデンティティは実はむしろ漢族地域よりも希薄なのです。だから、どちらかという利益集団として存在するのはあくまで民族の共同体、民族共同体的なものがそういうアイデンティティの主体になっているということ、そこに民族区域自治の最大の問題があるので

す。
中見　　まさにそうですけれども、ただ一つ付け加えますと、「地域」と「民族」という問題ですが、これは面白いことが言えます。内モンゴルにいるモンゴル族の人に対して出自を聞くと、「モンゴル族」

と答えるでしょう。ところがさらに、このモンゴル族かと問えば、オラーンチャブのモンゴル族とかシリーン・ゴルだとかの返事が返ります。モンゴル族という一つの集団への帰属意識がありますけれども、その下位概念として、モンゴル語でいう「ノタツグ」、つまり郷里という意識があります。そこにエリアという概念、もともとはエリアではなくて、モンゴル族のなかの下位集団名ですけれども、それが出てくるということなのです。

ところが漢族の方をみると、例えば初めて台湾に行ったとき非常に面白くおもったのは、名刺をもらうと、本籍を書いてあるひとがいたことです、湖南何県とかね、ああいう名刺って僕は日本では見たことがない。ただしこれは外省人たちの場合です。台湾人にはないでしょう。台湾人といっている。そうすると内モンゴルに数世代にわたって生活する漢族の場合、「内蒙古人」とはいわないでしょうが、おそらく私は「包頭人」だとか「綏遠人」だとかそういう意識はあるでしょうね。

加々美 確かに、漢族の地域概念は、省からさらにもっと下まで来るのです。例えば寧波に住む漢族だったら「寧波人」ということになってきますし、いろんな諸都市や県レベルのところまで下がってくるのですね。

二 「モンゴル」における「内モンゴル」

高 加々美先生と中見先生のご議論から、なかなか面白いトピックスをご指摘してくださいと思います。「自治」の性格は興味深い話題です。例えば、国際法上に定められた「領域の権限」において、その取得様態の中の「原始取得」はもともと「民族自決権思想」の影響をうけたものです。その取得時効については学説上も争いがありますが、「自治」はその土地を領有する民族がその領土に対する所有・自決権を持つことに間違いありません。実際、内モンゴル自治区においてその自決権もかなり複雑な様相を呈していると思います。それは中国という国家主権に関わる問題ですから。

また「地域」という概念は分野によつてさまざまに定義されていますが、「アイデンティティ」にも関わっているのではないでしょうか。というのは、すべての「地域」は必ず名前を付けて示されるので、その名前はアイデンティティを語っているわけです。しかし現在、「地域」に関する解釈は「外部」的なものが支配的になり、ネイティブの視点による原初的・内部的な解釈はまったく無視されてしまったような気がします。

「モンゴル」に対する呼称を例にとると、中国語では「内蒙古」、日本語では「内モンゴル」や「内蒙古」のように呼ばれますが、モンゴル社会内部では「内モンゴル」「外モンゴル」のような呼び方はありません。モンゴル語彙の中では場所や方向を示す「内/Dotnyadu/ドトード」と「外/Gadadyadu/ガダード」という表現があります。そして、モンゴル社会内部では「内モンゴル」を「ウブルモンゴル/Übür Mongγol」と呼び、「ウブル」は「お腹」の意味です。そして「外モンゴル」を「アルモンゴル/Arū Mongγol」と

呼び、「アル」の元来の意味は「背中」なので。欠けるところのない人間の体を喩えるこの呼び方は、モンゴル人の「モンゴル」という存在は「腹」と「背中」からなり、不可分の存在であるはずという原初的認識を物語っているとモンゴル人歴史学者のジャグチツド・セチン（私奇斯欽）教授をはじめ、たくさんのネイティヴの学者によって指摘されています。

もちろん、その意味合いを「腹蒙古」や「背蒙古」と直訳するわけではないですが、その意味合いを示す音節の当て字を用いれば理想的ですが、現実では、モンゴル内部を除き、「ウブルモンゴル」や「アルモンゴル」というネイティヴの呼び方は国際上においても通用せず、「モンゴル」を示す呼び方は一種の政治的文化的言語的覇権主義に支配されています。当然、「モンゴル」という存在に対してもそれらによって左右されている次第ですが……。

中見 私も昔書いたことがあるのですが、「ウブルモンゴル」と「アルモンゴ

ル」とは、要するにゴビ砂漠を隔てて「陰」と「陽」という意味です。「ウブルモンゴル」を現在の中国では、モンゴル語のそういうニュアンスとは別に、「内蒙古」という漢語につなげている。「ドトードモンゴル」「ガタードモンゴル」という言い方がありますが、あれは「外モンゴル」、「内モンゴル」の直訳です。それでは、この「ウブルモンゴル」というモンゴル語表現を日本語では、どう訳すかという問題があります。私は「南モンゴル」と最初に論文を発表したころには書いていた。そうしたら当時、ドイツにおられたモンゴル人の学者から、「ウブルモンゴル」を「南モンゴル」と訳すのは適切ではないとのご指摘をうけました。

やはり「南モンゴル」というのはいい訳ではありません。それで、いまの中国というか漢語の世界では「ウブルモンゴル」を「内モンゴル」と訳しているから、ちよつとニュアンスに開きがあるのですが、まあそうかと。ただし、あまり今の内モンゴルでは「ドトードモンゴル」とは言わないでしょう。まして「ガタード

モンゴル」は、清朝時代では「外藩蒙古」という意味もあり、これには内モンゴルもふくまれます。今の外モンゴルという言い方とまたそれも違うし……。

フフバートル そうです。これについては、まず加々美先生が提起された中国共産党の「民族区域自治」という視点からの「地域」としての内モンゴルの問題から述べさせていただきます。

今私たちが言っている「内モンゴル」（内蒙古）は「内モンゴル自治区」の省略形なので、これは明らかに地域名称です。もちろん、「ゴビより南のモンゴル」という地理概念としての意味が失われたわけではありません。しかし、中見先生がすでに触れられたように、中華人民共和国が成立して、その約二年前に樹立した「内モンゴル自治政府」が「内モンゴル自治区」になるまでは「内モンゴル」という行政区、つまり、地域としての内モンゴルは存在しませんでした。

「内モンゴル」という名称は、清朝時代の「内ジャサグモンゴル」に由来するものなので、主として、ゴビより南の六盟

(チヨールガン) 四九旗(ホシヨク)のモンゴル地帯を指す意味で、行政的意味でも使われていましたが、統一した行政区を指すものではありませんでした。

それに、中華民国建国以降は、清朝時代の内モンゴルにおける「盟旗制」も崩壊していましたので、国民党の政策に抵抗していた中国共産党は、「内モンゴル」という名称を民族概念として使用せざるをえませんでした。一方、国民党政府側は「内蒙」はもう歴史的名称なので、使つてはいけないとしていました。そういうわけで、中華人民共和国建国以前の中国共産党の文献には「内蒙古民族」という用語が数多く見られますが、それはすでに社会主義革命が成功した「外モンゴル」(モンゴル人民共和国)のモンゴル人を除くモンゴル民族を指すという意味で、主としてゴビより南に分布するモンゴル人地帯、つまり、「内モンゴル」を民族として捉えた名称でした。

このように、中国共産党にとって「内モンゴル」は、中華人民共和国建国以前は「民族」でしたが、それ以降は「民族

区域自治」という自らの民族政策を実施することにより、「内モンゴル」を「民族」から「地域」に変えていったと考えられることができると思います。それを象徴するのが「内モンゴル自治政府」を「内モンゴル自治区」に取り替えたことです。

話はもどりますが、「内モンゴル自治区」を「新疆ウイグル自治区」や「寧夏回族自治区」など少数民族自治区名称に見られるように、地域名を民族名より優先させるためにも「内モンゴル」は民族ではなく、地域名でなければなりません。



フフバートル [Huhbator]

んでした。そういう意味では、内モンゴル自治区で「区域自治」が実施されてきたこの五〇年は、そこに分布するモンゴル人にとってはまさに「地域」を押し付けられてきた歴史的過程を意味するものです。というのは、「内モンゴル」が望んできた「自治」は、「民族自治」であり、「区域自治」ではなかったからです。二〇世紀前半の内モンゴルの歴史からみれば、「民族自治」ですら、それは政治的最高の目標ではなく、あくまでも政治、経済、軍事的弱者としての選択の結果にすぎません。現在の内モンゴルの「自治」問題を語るには、こうした内モンゴル、つまり、そこに住むモンゴル民族の「自治」の歴史に着目すべきだと思います。

「自治」が上から、または外からの圧力や支配に抵抗し、自分たちのことを自ら治める権力を最大限に獲得しようという政治的手段という意味では、その権利は戦って得なければならぬものですが、こういう意味では、一九三〇年代初めごろから徳王(デムチュグドンロブ)が西部内モンゴルで行った自治運動は、モン

ゴル人が自主的に始めた「自治」でした。それは中国国民政府が内モンゴルに対して、「自治」ですら認めようとしなかったことに對して起こった運動だからです。

「内外モンゴルの統一」が無理なら、「内モンゴルの独立」、あるいは、それに向けての内モンゴル全土の行政的統一を政治的目標にしてきた二〇世紀前半までのモンゴル民族の歴史、あるいは内モンゴルの政治的状况からして、「自治」とはけっしてモンゴル人が目指してきた政治的目標ではありませんでした。

それにもかかわらず、内モンゴルの政治的統一以降、中国共産党政権が行った「区域自治」はモンゴル人が主人公になるモンゴル人地域の作り上げではなく、むしろ自分たちが少数民族となるといって、圧倒的に人口の多い漢民族と共存しななければならない新しい地域を作り上げなければならぬものでした。それに、人口のバランス関係はモンゴル人が不利に回される一方に進んできたわけです。

いうまでもなく、ここでは「内モンゴル自治区」という地域内部の利益集団と

してのモンゴル民族と漢民族の経済的衝突が避けられたわけではありません。遊牧をするモンゴル人と農耕をする漢人の土地や水、木など資源利用の仕方など、生業上の大きな違いがそのまま両民族の経済利益の衝突につながるものでした。

ですから、モンゴル人がこうした「区域自治」に對して消極的だったのも当然のことでしたが、消極的だったために、「区域自治」に對しては受身的になって、そうした自治政策には流されがちだった面があると思います。

このように、もし「排他性」という考え方が内モンゴルのモンゴル人にも適用されるなら、それはおそらく「統一」や「独立」の敗者としての内モンゴルのモンゴル人における政治的イデオロギーの後遺症が「自治」や「共治」の問題などに、その場その場で反応していたと考えてもよいのではないかと思います。つまり、なにかにつけ、モンゴル人が政治的に不利に回されるたびに「こんなはずがなかった」と思う気持ちが働いているということです。しかし、モンゴル人もいつ

までも被害者意識でよくよせずに、民族の利益ばかりでなく、地域の主人公として積極的に前面に出なければならぬと思います。そのために、モンゴル人は実際に政治的拘束なしに政治、経済、いろいろの意味で地域を共同で担っていく力を養成する必要があります。

次に、中見先生がおっしゃった内モンゴルという区域の政治的統一、または再統一が中国共産党の指導のもとではじめて実現したという事実についてですが、まったくおっしゃる通りだと思います。

すでにお話があったように、一九四七年五月一日東部内モンゴルの王爺廟（現オラーンホト、「赤い町」の意）に内モンゴル自治政府が誕生してから、一九四九年一二月に自治政府は自治区人民政府になります。その後自治区の管轄区域が次第に西へ拡大していくにつれて、自治区首府も西へ移転していきます。一九五二年六月に首府を察哈爾（チャハル）省の張家口市から綏遠省の歸綏市に移転させて、一九五四年四月に歸綏市を「呼和浩特」（フフホト、「青い町」の意）に改

めまます。一九五六年一月には最西端の「アラシヤン二旗」と「エジネー一旗」を甘肅省から自治区領内に入れることによつて、内モンゴルの行政的統一が最終的に実現して、現在の内モンゴル自治区が地理的に完成できるわけですが、その範囲は、中国共産党が日本軍の「滿蒙政策」と国民党政府による内モンゴルでの省県制導入を牽制するために出した「三五宣言」で知られる「中華蘇維埃（ソヴェエト）中央政府対内蒙古人民宣言」（一九三五年一月二〇日）に示された「内モンゴル」の行政的範囲をほぼ含めています。

それは、「内モンゴルの六盟・二四部・四九旗、チャハル、トゥメッド二部および寧夏三特別旗を内モンゴル人民に変換すべきで、設省を口実に内蒙古民族の土地を剥奪してはならない」という内容でした。

寧夏省に属していたアラシヤン・ホシヨード特別旗とエジネー・旧トルゴード特別旗は、もともと「内モンゴル」ではなく、新疆や青海省に分布するオイラド・モンゴルの一部なので、西部モンゴ

ルに位置づけられてきました。それを隣接する内モンゴル自治区に入れてくれたということは、中国共産党が「内蒙古人民」、あるいは「内蒙古民族」に対して、「三五宣言」で言ったことを実現させてくれたと考えなければならぬと思えます。

オランフーが中国共産党の指導によつて実現させた内モンゴルのこの政治的統一については、オランフーとは異なる政治的理念を抱いて内モンゴル全土の統一を図ってきた徳王、つまり、日本軍に協力したことで中国共産党から批判されてきた勢力も内モンゴル統一を実現させたオランフーの腕前を評価していたという報告があります。

また、徳王側の陣営にいて、自ら内モンゴル自治運動に携わっていたアメリカ在住のジャグチツド・セチン（札奇斯欽）教授は、二冊からなる彼の『我所知道的徳王和当時の内蒙古』私が知っている徳王と当時の内モンゴル』の結びに「徳王の長年の念願がついに名義上実現した」と、内モンゴル統一の正の一面を評価す

ると同時に、「漢民族の移民は点と線の存在からすでに面に展開されている」と、自治区の設立や拡大によつてモンゴル人と漢人の人口のバランスが大きく崩れたという、内モンゴルの歴史に生じた大転換の事実、すなわち自治区成立の負の面をわかりやすく指摘しています。

と申しますのは、自治区設立以前の「内モンゴル」は行政的に、または住民の分布範囲は、「三五宣言」に示されたように、いわゆる「蒙旗」（モンゴル人住民を主体とする諸旗）に限るものでしたが、自治区の設立と拡大にともない、「蒙旗」周辺（全体的には南側）の漢人行政地が広範囲にわたつて自治区に加えられたので、中国共産党は「三五宣言」で示された「蒙旗」の領土統一を実現してくれたものの、その代価として付加させたのがそうした漢人地帯を含めた「地域」としての内モンゴルの設立です。

それから、「内モンゴル」（内蒙古）という名称についてですが、その政治的意味とモンゴル語の名称の問題について私は、上に述べたことの一部を含めて、二内

「蒙古」という概念の政治性」（『ことばと社会』一号、三元社）という論文で論じたつもりですが、手短く述べさせていただきます。

まず、中見先生がおっしゃったように、「内モンゴル」を「南モンゴル」と言い換えるのは適切ではないと思います。「南」や「北」というのは一般的にみて相対的なもので、内モンゴルを「南モンゴル」と呼ぶことは、独立国のモンゴル国を「北モンゴル」と見なすことにつながりかねません。逆に、「内モンゴル」という名称の存在がモンゴル国を「外モンゴル」と見なすための材料になるという考え方もあるかもしれませんが、「内モンゴル」という名称を変えようという動機としては、「内蒙古」「外蒙古」という名称を清朝のモンゴル支配が生んだ中国から見た「内」と「外」と考えていることが根強いように思われます。

しかし、二〇世紀前半のモンゴル民族の歴史においてはどうでしょう。外モンゴルの独立によって、「外蒙古」や「外モンゴル」というのは歴史的名称になりま

した。これは周知の事実ですが、その後、「内蒙古」という名称は、内モンゴルの政治的統一を目的とした政治活動においてモンゴル人に一貫して使われてきました。内モンゴル全土を包括できる名称がほかになかったからです。清朝崩壊以降、「外モンゴル」が消えたことによって、「内モンゴル」という名称は「外モンゴル」との行政上、名称上の相對關係という、モンゴル人にとってネガティブな意味から切り離されて、ポジティブな意味で一人歩きしてきたと考えています。

周知のように、「内モンゴル」には「ドトードモンゴル」と「ウブルモンゴル」という二通りのモンゴル語名称がありました。二〇世紀前半の文献では「ドトードモンゴル」が一般的でした。それがその後には「ウブルモンゴル」としか言わなくなりしました。この名称の切り換えの時期について、私は当時の各新聞から調べてみましたが、「ドトードモンゴル」という呼称が「内モンゴル自治運動連合会」の機関紙『アウトノミト・ドトード・モンゴル』（自治内蒙古）から完全に姿を

消したのは一九四七年五月一七日（No. 54）以降で、「ウブルモンゴル」が同紙に登場したのは同年四月一〇日（No. 50）以降でした。そして両者の使用率が逆転したのは五月二日（No. 53）からでした。

すなわち、一九四七年五月の「内モンゴル自治政府」樹立を境に、「ドトードモンゴル」は「ウブルモンゴル」に変わったという事です。これは「内モンゴル」という概念に起きた重大な変化を示すものでしたが、漢語の「内蒙古」には名称上この変化が示されなかったため、「内モンゴル」（内蒙古）という名称をネガティブな意味で考える人たちがいるわけです。

このように、「内モンゴル」のモンゴル語名称に起きたこの大きな変化、すなわち、「ドトードモンゴル」という「内札薩克（ジャサク）蒙古」に由来する名称が、内モンゴルの統一をきっかけに「ウブルモンゴル」というモンゴル語固有の名称にもどったという、この名称の政治的意味の変化は内モンゴルのモンゴル人歴史家たちの間でもあまり意識されていない

かつたようです。それが内モンゴルで編纂された『歴史名詞辞典』の「内蒙古」関連の諸項目などにも反映されていますが、その最も典型的な例が、内モンゴル自治区の歴史上最も重大な冤罪事件として知られる、内モンゴルのモンゴル人全体が政治的迫害を受け、膨大な数の死者を出した「内人党（内蒙古人民革命党）事件」の「内人党」がモンゴル語で「ウブル・アルディン・ナム」（ウブル・モンゴリン・アルディン・ホビスハルト・ナムの略）と訳されていることです。これは大きな間違いでした。

と申しますのは、内モンゴルの歴史上名称として存在したのは「ドトード・モングリオン・アルディン・ホビスハルト・ナム」だけだったからです。ですから、「内人党」は正確には「ウブル・アルディン・ナム」ではなく、「ドトード・アルディン・ナム」でなければなりません。

三 内モンゴルにおける「アイデンティティ」

中見 どうですか、「内モンゴル」という

のを、ひとつのまとまった区域とすれば、この次の「共治」という問題に係わるわけですが。内モンゴルという共通の故郷というアイデンティティは、例えばモンゴル族やら、内モンゴルで二、三世代がすでに経過している漢族、回族のあいだで、そういう同郷意識というのは形成されていますか。しかしやはり、そう聞かれた場合、モンゴル族なり、漢族なり、そういうアイデンティティの方が強いものでしょうか。

フフバートル 日本で見られる「内モンゴル」の集まりなどを見る限り、それは基本的にモンゴル人の集まりを意味するもので、地域アイデンティティによる多くの漢民族を含んだ「内モンゴル」の集まりはあまり見られません。もちろん、中国国内では状況が異なると思います。内モンゴルで比較的若い年齢層の人たちは、自分が所属する「アイマク（盟）」「ホシヨク」（旗）の行政区名で自己紹介をする場合が多いです。それはモンゴル人にとつては、「ホルチン」とか、「オルドス」とかというモンゴル本来の部族へ

の所属意識を示すことに重なる面もありますが、盟や旗、最近は「盟制」が「市制」に徐々に切り換えられていますので、盟（市）・旗といった行政区名が「地域アイデンティティ」の表示に使われる傾向がますます強くなっています。それには当該区域に比較的新しく移住してきたモンゴル人やそこに居住する漢民族も含まれているので、普遍性があります。こうした「盟、市、旗」といった行政地域アイデンティティの上位なのが「地域」としての内モンゴルアイデンティティのほうです。

私はモンゴル語やその方言といった言語の問題を研究していることもありまして、言語に対する関心から相手の出身地を「ホルチン」や「オルドス」、「チャハル」といった部族名で知りたくなります。それは現代モンゴル語の方言の分布が部族の分布とほぼ重なるからです。

いうまでもなく、方言の相違は地理的分布の相違を意味するもので、それがまた文化の相違にも重なりますが、こうした相違性はアイデンティティの違いに直

接つながらるものです。こういう意味で、内モンゴルにおけるモンゴル人の「民族アイデンティティ」の下位部分について語る事ができますが、大体、「ジューン・モンゴル」（東部モンゴル）と「バローン・モンゴル」（西部モンゴル）のよう分類することができると思います。

内モンゴルにおける「ジューン・モンゴル」と「バローン・モンゴル」という認識は、「バローン・モンゴル」が伝統的な遊牧の生活文化を比較的長く維持してきたのに対し、「ジューン・モンゴル」は農耕生活文化に同化している、あるいは同化したつとあるという意味において、それは純粋な地理的違いを示すものではなく、むしろ、文化的違いを意味するものです。

かつては「東蒙」と「西蒙」という地理上、行政上の分類がありました。が、「ジリム」「ジョスト」「ジョー・オド」「シリーン・ゴル」の四盟が「東蒙」に属して、「オラーンチャブ」「イヘ・ジョー」の二盟が「西蒙」でした。しかし、ここで「東」に分類された「シリーン・ゴル」

は、現在のモンゴル人の意識や認識に従えば、「シリーン・ゴル」こそ典型的な「バローン・モンゴル」で、「東」ではありません。

また、興安嶺（ヒンガン・ダヴァー）の北麓から展開する大草原である「ホロンバイル」は、地理的には東部ですが、モンゴル人の意識の中では「ジューン・モンゴル」ではありません。もちろん、地理的には「バローン・モンゴル」にもなりえないので、モンゴル人の意識では「ホロンバイル」は「ホロンバイル」ではないといえます。文化、生活習慣や言語的には「ホロンバイル」はむしろ「バローン・モンゴル」に近いのです。

文化的にみた東西内モンゴルの地理的境界は興安嶺であると考えることができません。というのは、興安嶺より西は全体的に標高千メートル以上なのに、東部では百メートルくらいのところもありま

す。海からの湿気が興安嶺に遮断されているために、興安嶺の南麓と西部とでは湿気も温度も大きく異なります。それが生業に強い影響を与えています。遊牧と

農耕という生業上の大きな違いは、東西内モンゴルの生活文化のみならず、言語の表現などモンゴル語のあり方にも大きな影響を及ぼしていますが、それがアイデンティティの違いに直接つながって

います。

しかし、西部の「トゥメド・モンゴル」などすでにモンゴル語を失っているモンゴル人たちを含め、内モンゴルのモンゴル人は、「モンゴル民族」、または「モンゴル人」アイデンティティをはっきりもっている場合が多いです。ちなみに、「トゥメド・モンゴル」は西部に位置していますが、完全に農業をするようになって

いること、そして、基本的にモンゴル語が話せないためか、「ジューン・モンゴル」と「バローン・モンゴル」とは特に関係なく、「トゥメド・モンゴル」と意識されるようになって

います。

漢語の「族」、モンゴル語では「ウンデステン」は確かに政府の政策と教育を通して身に付けられた概念や名称ですが、あまり教育を受けていない庶民の層では、漢語では「レン」、モンゴル語で

は「フン」、つまり、今でいう「民族」の違いを「人」と言って区別するのが普通でした。

いずれにせよ、内モンゴルのモンゴル人たちは、モンゴル語が話せるかどうか、モンゴルの伝統的な文化を維持しているかどうかを問わず、そのほとんどがモンゴル人、またはモンゴル民族アイデンティティをもっています。それは、チンギス・ハーンを象徴とするモンゴルの本源——イジゴール（モンゴル国のハルハ方言ではヤズゴール）、またはオグサーへの帰属意識が働いていると思います。

チンギス・ハーンがモンゴル人アイデンティティの象徴であることは、モンゴル語が話せないオラーンフーが一九四四年四月に『解放日報』に「モンゴル民族の先祖チンギス・ハーンを記念する」という文章を発表したり、一九四七年四月二三日にオラーンホトで行われた内モンゴル人民代表大会で、内モンゴルの政治的統一の意義について、「チンギス・ハーンの子孫の大団結を象徴している」と述べたりしていたことからわかります。

それはオラーンフー個人の民族アイデンティティを示すものでもありませんが、チンギス・ハーンを象徴に掲げることがモンゴル人を支配するのに最も有効であることはほかにも例があつて、よく知られています。

ちなみに、「民族」という近代用語は最初モンゴル語で「オグサータン」（本源が同じものたち）でしたが、今は「ウンデステン」（根が同じものたち）となっています。ですから、内モンゴルのモンゴル人の「民族アイデンティティ」、または「モンゴル人アイデンティティ」は当然ながらモンゴル国のモンゴル人も包括するものです。しかし、モンゴル国のモンゴル国民としてのモンゴル人アイデンティティには内モンゴルなど国境外のモンゴル民族が含まれないのも自然なことです。こうした同じモンゴル人アイデンティティの包括範囲のずれが国境両側のモンゴル人同士の間相互理解においてトラブルの元にもなっています。それに、モンゴル国の「ウンデステン」または「ウンデスニー」は、nation がもつ「国家」と

「民族」の両方の意味で使われています。それに対して、内モンゴル、または中国領内のモンゴル語の「ウンデステン」は「民族」の意味でしか使われていないので、相互に認識のずれや誤解が生じるのもやむをえないことだと思います。

加々美 フフバートルさんが今指摘された問題はむしろ言語も地域も関係なく、簡単に言うところチンギス・ハーンに子孫を求めていくようなそういう意味での「ウンデステン」でしょうね。そういう考え方があるの原点になっていく場合、漢化というものが起きていても、確かに漢化はダブル・アイデンティティを生み出すとは思うのだけれど、だけど、それを超えて進めます。

例えばナルビリカさんが最近雲南教育出版社から出した『現代という時代の背景下におけるエスニシティの構造』（『現代背景下の族群建構』）という本があるのですが、その中で彼は、別にモンゴルに限らない、「民族アイデンティティ」について面白い指摘をしています。「民族アイデンティティ」を従来のスターリンが規

定した民族概念に沿った意味でアイデンティティを考えたなら、今の「イジゴール」や「ズゴール」というのは「民族アイデンティティ」にはならないと指摘するわけです。概念的にはそれにピッタリフィットしないけれども、それは明らかにある種のアイデンティティと言わねばならない。だからこの際、民族の概念を使わないで、エスニシティの概念に変えて用いようではないかと。エスニシティは元来アイデンティティに関連する意味では中立的概念として用いられた時期もあります。

四 「共存共治」と「アイデンティティ」の間

高 中見先生がおっしゃった多民族の二世代、三世代の「同郷意識」の問題、つまり多民族間の「共治」あるいは「共生共存」の課題ですが、フフバートルさんと私のようなモンゴル族出身の人々にとって、これはとても微妙な問題なので

す。

この座談会が始まる前に中見先生が言



..... 高 明潔[Gao Mingjie]

及された「回族のダブル・アイデンティティ」という拙論ですが、それは回族が持つ「中国人としての意識」と「ムスリムとしての意識」を「ダブル・アイデンティティ」と定義し、それらの意識の生成とその共存スタイルについてのある段階までの考察なのです。それと関連すれば、私はモンゴル族として、自民族、とくに若い世代のアイデンティティについて語り難い立場にあります。しかし現実には、中国領内のモンゴル族には、そういう「ダブル・アイデンティティ」を確か

に持つ者が一般にいるということは否定できません。

アイデンティティの発生とその維持はやはり総合的な意味合いを持つ「文化」とつながると思われまふ。文化の面ではモンゴル文化と漢文化との相違は明らか事実です。その相違が言語や文字など日常生活においても具体的に表れていふます。特に歴史認識や物事に関する価値観などはそうです。

また、フフバートル先生はモンゴル人のアイデンティティは「地域」と「方言」に左右されると指摘されましたが、確かに、アイデンティティは社会的・文化的な環境に制約されるものと考えまふ。これは私の研究課題の一つです。内モンゴル自治区における「共生共存」という命題も実際この社会的・文化的な環境に関わるのです。

と申しますのはフフバートル先生が指摘された、モンゴル全体がいくつかのグループに分かれている現状があるわけです。具体的に言うると、内モンゴルでは東部と西部を問わず、その農業地域に分布

しているモンゴル族と漢民族との間の、土地問題をめぐる揉めごとや対立は、歴史問題や現在の問題とされながらも、市場経済化の進展後、民族間に共通する経済利益を対等な形で探し求めるために、ある種の「共生共存」の様子を呈していると言えます。

その一方で、「共生共存」の課題追求によって発生する困難は牧畜（遊牧）生業地域にむしろあると思います。それは遊牧地域でのモンゴル族の牧畜民と外部、とくに改革開放以降相次いで移住してきた内地の田舎の人々との関係に表面化されています。これは私が内モンゴル北中部の奥地にある一つの行政単位の地で追跡調査を行っている際に気づいた問題です。その地域はフフバートル先生もよくご存知だと思えます。純粹な遊牧畜社会と言えるところですが、八〇年代の初期にその地に国家の石油開発センターに属する石油採掘の工場が設立されて以降、大量の労働者やその関係者が内地からやってきました。このため、その地においてさまざまな変化が起こったばかり

ではなく、地域行政と石油採掘工場とがどのように「共生共存」していくのかが課題となっています。

加々美　そこで僕も高さんのモノグラフを見させて頂いて、確かに漢化が進んでいる地域はたくさんあると思うのですね。しかし実態としてはアイデンティティにはいろんな政治的な意味合いを帯びているわけです。現在漢化された非漢民族のダブルなアイデンティティが高さんの言うようなかたちで生じていたにせよ、そのダブルなアイデンティティを超えるある種、統一的なアイデンティティが存在し得るという考え方がナルビリカさんから出されていることからすると、僕は今のお話を聴いていて、非常に啓発をうけましたけれど、重大な問題だなと思うのです。高さんが言っている「ダブルなアイデンティティ」と「ウンデステンのアイデンティティ」とはどう関連するのかという問題でもあるのです。

高　これについてはやはり「共生共存」という問題を軸に議論したいです。確かに、周辺社会の変容に言及すると、漢化

されるしかないとか、中央の政治システムに飲み込まれてしまう、というような見解が支配的であるのは事実と言えます。この点はとても遺憾に思います。と言いますのは、それは社会変容を考察する際に、「外」と「内」という弁証的視点に欠けると思うからです。「共生共存」という問題はまさに周辺社会がもつその自己変革の力によって生まれた課題であると考えます。そうでないと「漢化＝単一化」されてしまった社会に対してその「アイデンティティ」を考察する意味はなくなると思います。

その地域の例を取り上げてみましょう。そこは二〇〇二年にはいわゆる伝統的な行政区画であった「ソム」から「鎮」に変わりましたが、その変容のプロセスを検討してみると、まさに社会の内側の力によって発生した変革に違いありません。それは外部のシステムの刺激を受けて自らの文化を守ることができたからこそ初めて、異なる民族との「共生共存」ができることを物語っています。

中国の内地から見るとモンゴル社会は周

的・非主体的な存在であるため、その社会が卑下されがちなことは言うまでもありません。しかしながら、モンゴルのような長い歴史を持つているその社会の内部において実行・変革の力を持っていることは否定できないことでしょう。それに社会進化論のみから見ても、現実にはモンゴル社会の内部はいつまでも閉鎖的な状態にあるわけではないのも事実なのです。

例えば、その地域におけるその内部に蘇生してきた力によって、その地域の牧民が牧畜業を放棄する必要がなくても、その戸籍をかつての「農村・牧区戸籍」から「城鎮戸籍」に変えることはでき、町の人口としてその権益が保障されるのです。また、牧畜民の子供らは町や都会の学校に通うことができ、将来の就職においても戸籍上の制限がなくなる、というようなメリットをもたらしましたが、そのポイントは、「鎮」に改編したからこそ、その地域は「採油工場」とうまく「共生共存」していくことができたというところにあるといえます。

また、「ソム」より高いレベルの行政権限をもつ「鎮」へ改編してから、その権限によって「採油工場」の職員や労働者の居住管理をその管轄下に置くことができ、さらには自らの開発権益が主張できるようになり、地元の人々の権益や安全を保障できるようになりました。この変更は「アイデンティティ」のもとにこれまでお互いにうまくいってないところを改善するために取った措置です。それによって「共生共存」の環境を探し求めるのです。

何年か前に私がその「採油工場」の責任者を訪問したときに、次のように正直に語ってくれました。

これまでこの工場はあちこちに移動し採油・煉油作業を行ったが、モンゴル族の遊牧民ほど素晴らしい人々に会ったことはなかった。我々はかつて内地の各地に赴いたが、特に内地の田舎では工場の採油器材や採掘された石油がよく盗まれた。地元農民は、「我々の土地を占有したから、このくらい私たちに使わせるのが当たり前だ」と我々をよく非難をした。

しかしこのモンゴル族の地域に入ってから、我々の材料や機材が盗まれたケースは一度もなかった。反対に、採油工場の人々が週末に草原に遊びに行き、遊牧民の家族を訪問するとすぐくもてなされ、とても感動した。問題は我々の方にある。例えば、採掘された石油を内地のある省の煉油工場まで運ぶ途中で、運んでいる石油が少しずつ漏出したかのようにみせかけて盗まれたことがよくありました。さらにこの工場に臨時的に寄る者が牧民の家畜を盗むこともある……。

「共生共存」という命題を考える際に、さまざまな要因で内モンゴルの草原地域にやってきた外部の人々が、どのように内部の人々と接するかも、興味深い研究課題です。市場経済の進展につれて、単位制度、つまり職場制度が次第に崩れている現在において、国家などの企業に属した元職員らが当地にそのまま残らざるを得なくなりました。それによって、都会や町はともかく、特に草原地域の牧畜民はさまざまな要因で起きたこれらの「共生共存」を求める状況に直面することに

なるのです。極めて複雑な状況だと思いません。

盗みを行ったケースが必ずしも漢民族の農民全体を代表するわけではありません。まったく違う環境である草原の奥地に入り、すぐには生活の手段を得られずに窃盗を行うことは理解できませんが、牧畜民が厳しい自然環境の下で養育している家畜を盗むということは許し難いことです。その鎮は二一〇七平方キロメートルの行政区画を持っていますが、牧畜民は全体でわずか一二〇〇人余りしかおらず、しかも広く分散しています。それに対し採油工場には、約四〇〇〇人余りの人々が集中している。このような人口分布の関係があるため、当然うまくいかない問題が現れます。

去年二月頃に起きた事例を挙げてみましょう。その地域では冬になると家畜の群れを放牧せずに家の近くに設けてある柵囲いで餌を与えて飼育しています。ある晩、遊牧民の一家に飼育されていた牛一二頭が全部盗まれ、トラックで運び去られる窃盗事件がありました。のちにそ

の一家の事情をよく知っている近くに住む人々の仕業であったと明らかにされました。牧畜民が家畜を管理するためには、その住居が平均三キロメートルから五キロメートル以上離れていなければならぬため、被害者一家がその夜の出来事すぐに電話で隣家に知らせたにもかかわらず、離れた距離にある隣家からはすぐに駆けつけることはできませんでした。

その地域が「鎮」に改編される前は、このような盗難事件を処理する度に「採油工場」との関係に配慮しなければならぬという制限もありましたが、鎮に改変してからは、その管理権限が採油工場の住民まで及ぶようになったため、こうした家畜の盗難事件を処理する際、鎮政府や公安の権限は採油工場の人員にまで及ぶことも当たり前になりました。また、市場経済化のもとで単位制度、つまり職場本位制度が次第に崩れつつあるために、国家企業に属する職員や工具が当地に残ることになるという問題に直面している地域は、「鎮」への改編をすれば、それら外来的存在を管理する主導権は自治

権を握ることができるようになります。つまり「ソム」から「鎮」へ変更したことは、一方的な「漢化」によるのではなく、「共生共存」を探し求めようという理念のもとに、社会の内部から発生した変革なのです。これについては論文をまとめておきます。

フフバートル先生と私のような都会や町に生活してきた人間の場合、同じ環境において周りの人々の民族的出身にあまりこだわらずに、みな仲良く共存することが比較的簡単にできます。換言すれば、異なる社会的環境に対応できますが、広く草原に分布するモンゴル族全体の四分の三余りを占める遊牧民たち、すなわちいわゆるモンゴルアイデンティティを強く維持している人々が、これから市場経済の変化の中で、どのように外来の人々と共生していくのか、ということが私としては研究課題なのです。さきのあの地域の話はその一例にすぎないのですが、それはその地域の「内側」が「外側」に対して取っている対応措置で、それは自らの「アイデンティティ」を示す一種の

努力であると考えられます。

「共生共存」という課題は興味深い命題であると考えます。閉鎖的視点で周辺社会や少数民族社会を機械的に処理するなら、「共生共存」は不可能で、「早晚に同化されてしまう」という見解に到るかも知れませんが、動態的・弁証的視点で周辺の存在を扱うなら、この「共生共存」という課題からかなり興味深い命題を探し出すことができると考えます。それは「アイデンティティ」を構成する「原初的要因」に緊密に関わっているからです。この「原初的要因」を無視しない限り、現代社会や異なる社会環境に対応するためにモンゴル族社会がとっている措置を考察に加えた上で、「ダブル・アイデンティティ」という課題が登場してくるわけ

です。

加々美 今、高さんがお話になった問題とフフバートルさんや中見さんが出した問題はどうかつながるのかを考えてみたいと思います。主に高さんがお話になったのは、開発問題、あるいは市場的な意味での開発原理というのかな、レジュメに

もありますが、それによって起きてくる生活レベルにおける文明の変容というか、生活レベルの変容が本当は文明の変容と言い得るかどうかは問題ですが、いずれにしても、言語も含め文化レベルのもの、遊牧に典型的に見られていたモンゴル族のグラスルーツの社会のあり様が大きく変わろうとしているという問題。

そのとき彼らはむしろ伝統的な自民族固有の文化や文明を守ろうとしてかえって行政的機構である鎮などを取り込んで自分のものにしていこうという方向性をたどったということですが。

さきほど、フフバートルさんが言われた内モンゴルの東と西の地域の区別、さらに興安嶺を挟んでさらに南と北の地域の区別、東西南北の各地域におけるもとの言語、その他の文明を含めた多様性というものが元来あったという問題、それをふまえたうえで、高さんの指摘したような開発型の変容が起きてきていて、「自治」や「共生共存」にかかわるアイデンティティの変容が起きる。「自治」はあくまで自治を担う主体がそこにアイ

デンティティを伴って確立していなければ、形骸化するわけですからね。開発に伴う市場原理によってアイデンティティまでが変容を受けるとすると自治の実態も変容を受けざるを得ない。オランフーがいわば民族区域自治を用いて東西南北の区別を越えて内モンゴルにおける統一を果たしたのだとして、それでは一体、現在、開発がもたらす社会変容はこの統一内モンゴルというアイデンティティにどのような影響をもたらししているのか、オランフー以降の時代、オランフー以降といっても大分長い時間が経過していますが、高さんがモノグラフや、調査で明らかにしたような事態がどのような影響を与えるかということを考えていただきたい。

中見 非常に抽象的なアイデンティティとかそういう問題ですけれども、中華人民共和国が成立して以降の時期で、区域的な民族自治というのが、具体的な内容として他の地方自治と違って保障されていた面があるわけです。いわば民族自治ないし地域自治を具体的に保障するも

ので、これは法律上にもあります。民族的な慣習は守るようにした時代もあり、文章が終わって以降は復活したケースもあります。そこで結局内モンゴルのモンゴル人がモンゴル人たることを保障されていたものの実体とはなにか。内モンゴルとして成功したもの、あるいは失敗したものとこの問題とつながるわけです。その点の評価はいかがでしょうか。

牧地の問題にしても規則や法律によって守られるべきものもあるし、そうでなくて自分たちの意思で守るといふものもあるわけですが、民族自治という方向性を具体的に守るところが、法的な大きな権利として自治区といふのを与えて、その中である程度民族といふものの存在の独立性を認めたとしたつて、それを具体的に保障するものがあつたはずなのです。それ自身が結局どの程度有効に機能するかという点の評価はどうですか。

五 「民族自治」における

「双語教育」

加々美 短くコメントしますと、一つは「双語教育」というのがありましたね。簡単に言えば中央政府の民族政策の原則は民族言語を擁護するということだったわけです。今、高さんが言っていたような、民族間、とくに漢民族と諸民族との間の「共生」というものを保つために双語教育がなされてきた。ところが、それはまだ市場原理的なものをそんなに帯びていないときは、それなりに民族言語を守る要因になつていたのですね。

言語政策について書かれた最近の論文を読みますと、一番大きな問題は、市場原理の浸透に伴つて双語教育が徐々にその機能を変えていってしまうのですね。というのは、漢語を学んだほうが、いろんな意味で、教育においても、ビジネスにおいても、さまざまな生産分野においても圧倒的に経済的に有用で有利に働くわけですよ。だから当然モンゴル族自身がむしろ漢語を重視し始めてしまう。と

くに世代交代が進んで、若い世代ほどモンゴル語を軽視して漢語を重視する方向を加速させる、そういう方向を誘導し加速させるものへと双語教育が働きを変えてしまう。そうした方向性を政策的には何ら止めることができないのですよね。だから、さつき高さんが言つたような開発に向かう状況が今後次々起きてくるとすると、最後の皆である民族言語も相当に衰弱してくる可能性があるわけです。

高 そうですけども、私としては母語という要素が弱体化してもそれは必ずしもアイデンティティを喪失することとは結びつかないと主張したいと思えます。ただし言語教育の問題に及ぶと、中見先生もフバートル先生も専門家でいらっしゃるのので、私は表面に現れているケースによる議論しかできません。

二〇〇〇年の国勢調査では、中国国内のモンゴル族は約四八〇万人前後で、そのうち三八〇万余りが内モンゴルに集中しています。ただし、この三八〇万人のうち約四分の三が遊牧地域に散在し、いわゆる牧畜民（遊牧民）なのです。四分

の一（最近四分の二に達したと言われているが）しか町や都市に居住していません。広い遊牧地域に散在する大多数のモンゴル族の「母語教育」や「双言教育」は課題となっています。

さきの地域を例にして見ると、その地の子どもたちがまず「ソム政府」所在地にある小学校に通い、小学校を卒業するまでモンゴル語を教授用語とした教育を受けます。その後、町にある「蒙古中学」などに進学すると、モンゴル語の授業に加え、漢語を教授用語としての授業も受け始めます。高校時代においても同様な「双語教育」を受けます。都市部や町に生れ育っているモンゴル族の学生の場合、いわゆる一〇点プラスするという優遇策を受けなくても、漢民族の学生と同等なレベルで入学試験に競争しあう力を持っています。奥地のモンゴル族の子どもたちの競争力は問題となっています。

というのは、大学の進学入試問題は国家統一で漢語によって出題されるので、漢語レベルが低ければ、より広い範囲への選択は制限されます。確かに中見先生の

がおつしやつたように、少数民族を守るためにあらゆる面の政策が国家政府より打ち出されましたが、モンゴル族の場合には進学や就職の厳しい現実のもとで、母語教育を放棄せざるを得ないか、あるいは母語教育を維持するが限られている専門領域に留めるという状態に乖離させられています。このため内モンゴル自治区の教育庁によって「三語教育」や自費で大学に通い好きな専門に専念するというプロジェクトが試みられています。

「三語教育」は重点高校を含む中学で推進されています。それは「双語教育」と並行的に英語教育にも力を入れるプログラムです。この「三語教育」によって、モンゴル族や他の少数民族出身の学生は、たとえ漢語の成績が良くなくても外国語の成績で上位ならば大学進学でき、さらには、海外留学にも優れた条件が備えられるようになりました。フフホトにある高校のデータによると、九〇年代以降、とくに近年、その少数民族出身の卒業生のほとんどは、大学に進学した後、国外に留学していたということです。

この「三語教育」はある意味では中国全体が外国語の学習を重視し、また若者が海外に憧れるという流れに入り込んでいくものに過ぎないのであり、自治区の教育部門にとっては自治区内の進学率を向上するために取っている一つの措置である、と言われています。しかし、これも一種のアイデンティティなのではないかと思われまます。このような「三語教育」は果たして「母語教育」を救えるかどうかについては問題です。これについて、言語学研究者のフフバートル先生はどのようにお考えですか。

フフバートル 内モンゴルには、モンゴル語と漢語のバイリンガルを意味する「蒙漢兼通」ということばがありますが、このことばが使われはじめた一九五〇年代には、遊牧地に勤める漢人幹部にもモンゴル語を学ぶことが勧められていたもので、この「蒙漢兼通」とはモンゴル人に限らず、漢人にも適用する用語でした。それが次第にモンゴル人の漢語のレベルを評価する用語、またはモンゴル人の漢語学習を奨励するためのスローガン

になつてしまいました。

この「蒙漢兼通」に似たような意味で、「双語教育」は内モンゴルでは「漢語教育」の「美称」のようなもので、実際は、「双語教育」などという政策が取られるはずと昔から漢語教育は進められてきました。遊牧地ですら「文革」よりずっと前から小学三年から漢語を教えなければなりませんでした。

中国の「双語教育」政策は方言や少数民族言語の教育を奨励するためにあつたのではなく、漢族の普通語（共通語）学習と少数民族の漢語学習にその意味があつたと思います。しかし、今は「双語教育」政策がむしろ民族語の維持に役立っている面があるようですから、民族語の擁護のためにはもう「双語教育」などという言い方を止めて、むしろ「民族語教育」を強調しなければならなくなるのではないのでしょうか。つまり、少数民族の生徒や学生に漢語の勉強を勧めなくとも、市場経済の浸透など、時代の急激な変化により民族語を忘れるほど彼らは漢語への同化が進んでいるから、むしろ

ん、地域による差が大きいと思います。

それに、「三語教育」なんですが、外国語が加わると結局、漢語教育が絶対的なものですから、民族語に余裕があるものは「三語」でしようけれども、そうでないものは、漢語と外国語という「双語」の方にいくんではないかと思えます。しかし、中国の「双語教育政策」というのはそんな設定のほうではありませんが。

加々美 なるほど。バイリンガルの養成は実態として、漢語の浸透を促進するということですね。と言わねばならない。だからナリビリカさんはこの際、民族の概念を使わないで、エスニシティの概念に変えて用いようではないかと。エスニシティは元来アイデンティティに関連する意味では。

フフバートル 市場経済が進むにつれて、遊牧地など田舎の子どもたちが町へどんどん入るようになったので、もともと人口が少なかった遊牧地では小学校もしだいに崩壊しているわけです。その子どもたちが町へ行つて、学校では母語で教育を受けますが、放課後はもう漢語の

世界ですから、モンゴル語の生活環境から離れてすぐ漢語に慣れていくわけですよ。

そういう意味で、モンゴル固有の文化の基盤をどれだけ維持できるかというのはまさに子供たちのこうした教育のありかたと言語の問題に関わっていると思います。

六 「共治」の中での「自治」

高 以上のフフバートル先生のご見解について、中見先生はどのように思われますか。四七年に「内モンゴル自治政府」を設立して以来、少なくとも六〇年代の初期までの内モンゴルのさまざまな面において「民族区域自治」が行われましたが、これについて、特にその時期の自治区主席を務めたオランフーへの評価について、どのようなご見解をお持ちでしょうか。

中見 オランフーは四六、七年の時期はほとんどモンゴル語ができないでしょう。モンゴル語を後発的に学んだと思います。自治区ができてから、文革が始ま

る少し前まで時期はある程度民族自治というものがいくつかの制度においても保障されていたし、それからもう一つ外的な要因としては、中国と当時のモンゴル人民共和国との関係がはじめは良好であったこともあります。内モンゴルのモンゴル族の方がオランブートル（ウランブートル）の大学に留学したり、あるいはモンゴルから内モンゴル自治区にもひとが教えに来るといった交流もありました。

固有の伝統的な価値体系や文化というものがどういう形で守られるか。入ってくるのは、漢人の文化だけではありません。グローバリゼーションという大きな流れがあります。そのような大きな潮流のなかで自分たちの価値というものがどうすれば守られるのか。それ自体が長期的な「共治」の中での「自治」ということですね。

加々美 今、「共治」の将来について問題が出て来ましたので、共治に関する朱倫の論点（「自治与共治」民族政治理論新思考「民族研究」二〇〇三年第二期）が反

響も呼んでいますので、その論点について少し簡単にお話します。

一つはさつき言いましたようにアイデンティティの主体は、地域的な集団であれ、あるいは民族的な集団であれ、いずれにしても、本来は自集団固有の利益を擁護しようとするところから出発する。

その結果通例は他の集団と一定の利益対立がおきるわけです。朱倫論文を読む限りでは間違いなくフバートルさんがお話しになったような現在の危機的状況をふまえて共治という概念を提出している感じがするのです。ということも簡単に言うとその集団固有の利益の排他的な主張を繰り返していく限り、簡単に言えば特定の民族が最終的には暴力的決起にいたるか、あるいは消滅するといった非常に悲劇的な結果を招く。

従って、そうではなくて、民族集団間の共通利益を追求するのが本来あるべき姿であって、しかもその共通利益は、朱倫の抽象的ロジックを借りればですが、民族集団間の均質化を前提として共通利益の基盤が成立するわけではない。共

通利益というのはそれぞれの民族集団の固有性というものを保持することを前提にしてこそ、初めて共通利益の基盤が生まれてくるというのです。だから、例えば一民族区域自治、例えば内モンゴル自治区でもいいんですが、モンゴル族の中にすらいろいろな対立があるということですね。その対立を共通利益の基盤に立って、内モンゴルの統一という方向に向かっていく。それは一定の共通利益の基盤に立ったがゆえに達成可能であると。単に相互の利益対立だけに終始していれば、内モンゴルの統一は成り立たなかつたと、朱倫の理論からいくとそうなるのです。そうすると、区域自治の内部的な統治においてもそうした共通利益というものが重要な意味を持ちます。とすると区域自治の外側、例えば中央政權の支配する、さきほど高さんは内地と言いましたけれども、内地的な部分との関係でも同様の共通利益を当然求めなければいけないし、その場合は民族自治区を超える範囲の統治に共同参画するという、内モンゴルの範囲を超えた広い範囲の共

同統治に内モンゴル自体が参加していくことが求められる。そこではつまり内向きの利益防衛的なそういう意味で排他性と同時に従属性を帯びた従来の自治が否定される。つまり中央の支援に依存する体質を変えていかなければいけないという。排他性と同時に従属性を克服するということがもう一つの共治の重要な目的であると彼は言うわけです。

ロジックではそうなのです。ただ、実際に共治というものは、今言ったように、現在、市場原理が急速に発展を遂げつつある外の世界に内モンゴルが関与していくというやり方をとったとき、圧倒的な市場原理が内モンゴル地域に及んでくる。そういう市場化圧力の土壌のもとで民族の固有性を奪う均質化への圧力をどこまで回避できるか。やはり普通考えれば、むしろグラスルーツの庶民感覚からいけば、市場原理が入ってくればそれはむしろチャンスなわけですね。

だからどうしても、例えば自分の文化の固有性を捨てても漢語を学ぶという、さきほどフバートルさんが言われ

たような傾向が非常に強まってしまふ。それを朱倫のようにきれいなロジックを用いて、民族的固有性を保ちつつ共通利益のもとで共治を行うという、そういうありかたが可能でしょうか。

民族区域を超えるより広い空間、場合によっては中央の統治にまで共同参画していくというそういう意味あいを新しい自治概念は持つべきであるという朱倫の主張は、この点で疑問が残らざるを得ない。まとめて言えば、朱倫も従来の自治、つまり民族固有の利益の防衛という意味での民族自治の擁護ということが否定される必要はないと言っている。固有利益擁護が行き過ぎて排他性が強く現れ他の民族集団と相互に衝突するというこというあり方は確かに克服されねばならないし、そうでなくては自治そのものが崩壊する。だからこそ従来の自治を超えた、一方で固有利益を擁護しつつ、共通利益の基盤に立つてそこで共治に参加していくという、そういう共治の概念を彼は提起しようというわけです。

これは今の中国の例えば外交政策、国

際政治学の外交政策を論じている王逸舟や、閩学通というような人たちが全く同じようなことを言っているのですね。中国の国家レベルで一国家の、自国の国家利益の擁護というものを排他的に主張するというやり方であつては、中国が国際社会空間において生存していく領域が減ってしまふ。むしろ諸国家間の共通利益の基盤というものを探し出してそこに生存空間を求めていくべきだということをも中国の国際政治学界でもいつているんですね。それと朱倫の議論は非常に似通っている。

中見 そういう説が出てくるでしょう。けれども純粹な草原地域のなかで伝統的な生活や文化を愛するものの立場から言えば、漢人がかかわってくる場合には果たして納得するのかどうか。同時に依存性を問うなといわれたつて、理念として説明するのはいいとしても、それをどう実現するか、本当にそれがどういう形で実現できるのかということだと思えます。

フバートル 少数民族地域が経済的に

中央に依存しているのは事実でしょうが、それがはたしてどれだけのものが少数民族自身の利益に直接つながっているのでしょうか。「地域」と「民族」を完全に割り切ることはできませんが、少数民族地域への投資を少数民族への投資のように勘違いする中国人も多いようです。内モンゴル自治区のような、漢民族が人口の約九割を占めるような民族地域では、国が地域に投資したとしてもそれは少数民族のためのものとは言えないわけです。それに、自然環境が厳しい広大な少数民族地域でのインフラや行政、経済の維持、発展を図るにはそれなりの投資をしなければならぬわけです。しかし、国家に資源開発をされた分、地域が利益を得ているなら話は別でしょうが。

民族区域を超える広い空間での共通利益の基盤に立つには、少数民族がまず民族区域の中で民族を越えた地域利益の基盤に立つほどの力が求められます。

中見 そういえば内地の各省のエスニックな問題が比較的すくないところで、例えば湖南省とか湖北省とかお互いの依存

体質をもっと大きな中国という枠組みの中で、地域が地域的な自治の能力を高めていくという可能性はあるでしょう。差があるところでそれを一体どっちの側から誰が提起するかによって違うでしょう。依存をやめると言われたって、自分たちの伝統的な価値自体とほかの価値を認めるのは結構としても、それをどう実現するか。

加々美 おつしやる通りで、簡単に言うとは水は高いところから低いところへ流れるというのがあるでしょう。だから、簡単に言えば経済的に見て市場原理が十分浸透していかないところへ市場原理は押し寄せていくわけです。そうしなければもちろん、簡単に言うと、仮に漢語を十分に駆使できるモンゴル人が多くなれば、ビジネスにおいてもより大きな市場圏を相手にしたビジネスができるようになる。その分、国民所得レベルでいけば、内モンゴルの所得は上がる、政府間の、国家間でいえばODA援助ではなくて、市場原理に基盤を置く実質的な所得を相当高めることができるといふことです。それは

確かに地域単位では所得増につながる。朱倫はそれを指して従属性からの脱却と言っているのですね。

しかし今言ったようにそれは市場原理を大々的に受容することが前提ですから、そうなるのであれば遊牧的な生産形態、生活形態は明らかに当然吹き飛ばされていく。それでそのときにモンゴル固有の文化とかさきほどフフバートルさんが言われたようないんなものがやはり消えていく。だから朱倫が明確に言うのは、依存性を脱却するということは、決して自力更生と同義ではないというわけです。それとは全然違うと。つまり自力更生というのはそこに一つの自律的なコミュニティを作り上げる。自律的コミュニティの下では確かに固有の文化は守られるのですね。

朱倫はむしろその種の自律性には否定的なわけです。むしろ自律的コミュニティからは脱却されねばならない。従来のように中央政府からのODA的な援助を自治区域へ流していくようなことを少なくしていつてむしろ統一市場圏の下

で地域の国民所得を増大させる、ビジネ
スチャンスをどんどん多くしていくとい
う議論になる。だから、あきらかに文
化的な問題のジレンマは全く回避して語ら
ないわけです。議論としてはそこは難問
ですね。実は朱倫の主張は事実追認のと
見ることもできます。言ってみれば、民
族区域自治の現実が市場原理の大波に洗
われているわけだから、それを理論化し
ようということですよ。

フフバートル 現実には実際そうなりつつ
あるし、「民族政策」や「自治」の色も急
激に薄れていきますが、市場経済の波に
乗っての行き過ぎた「内地」化で少数民
族の文化が抹殺されることは当然ながら
大きな問題を孕んでいきます。経済の発
展や近代化は民族間の違いを縮めるだろ
うが、文化の違いや民族アイデンティ
ティは依然として生き残るわけですか
ら。民族文化は軽視できない重要な要素
だと思います。

加々美 中見さんの言われたとおりで、
僕は当然文化的なものを含めた自治が問
題にならないかと思えます。朱倫

は明らかに実質的に文化的自治を否定し
ているのですよ。実はオーストリア、ド
イツで二〇世紀初めくらいに文化的自治
という概念が相当強調された。だけどそ
ういうものは基本的に今の時代には成立
しないと朱倫は言うわけですよ。しか
しやはり文化自治の問題は当然残ってい
るし、それが残っていく時、いろんなか
たちの矛盾がそこで爆発するわけです。

だから例えばいま現に中近東でもどこで
もグローバルゼーションと、地域アイデ
ンティティ、民族アイデンティティとの
間の衝突が激しく起きている。それは民
族主義というように一応は呼ばれている
わけですけど、単純な民族主義とは
違った文化的自治の要素が含まれますよ
ね。そういう意味でのぶつかり合いが世
界的にも現れているのです。中国で文化
的自治を否定する概念としての共治概念
が現れてもですね、やはりそう簡単に問
題がすんなり解決するわけではない。

中見 内モンゴルだけの問題ではないけ
れども、日本の地方自治でもそうでしょ
うが、独自性を保障するためには、やは

りなんらかの制度なり政策で保障する側
面が多いわけでしょう。今日本で問題に
なっているのは、地方の村はほとんど合
併される方向にあることです。その結果
行き着く先は一体何だろうということ
ですね、中国に関して言えばエスニックグ
ループというような、ある種の民族集団
があるわけです。やはり独自の文化とい
うものがあって、内モンゴル自治区と
いっても、一つの制度的な区画というの
があつて、その制度によつて保障されて
いる民族集団に対する利益なり、独自の
ものがあるわけですけども、実際問題
そのなかには空洞が実はある。おそらく
今の日本で起こっていることでもそうで
すが、やはり現実的な利益なり効率性な
り、そういうものから来る要求がある。
それに逆行するということ自体は難しい
ことです。やはりその自治の担い手とい
うのが問題でしょうね。もちろん中央政
府の意向に逆らつてということはない
でちがう。

おそらく民族自治なるものが今後も維

持できるとするならば、それぞれの固有の価値や文化を守るためには自分たちの文化に対する深い愛情なり、なぜそういう文化を持つことによって精神的に、安定するのかということを考えなければならぬ。アイデンティティというのはそもそも抽象論で、アイデンティティは時と場合、状況によって変わる可能性もあります。

加々美 ただ僕が少し気にしたいのは、例えば沖繩の音楽、三線（さんしん）の音楽は実際これだけ市場化が進んでも活力をもっていてしかもそれはむしろ世界に通じるようなものではないか。どうして世界に通じてなおかつ生き延び得るか、グローバルイズムの波に飲み込まれないかという、体感に発する土地の風とか土とかそうした香りに根ざして生まれてくるリズム感。どんなにがんばっても本土の日本人が沖繩の音階をまねて音楽を作っても、沖繩の人の発する音には及ばないのですよ。例えば馬頭琴で弾かれるモンゴルの歌があつてそれはどんなに市場化が進んでもモンゴルの土地の持つて

いる風や土といったようなものが生み出す固有のリズム、要するに体感に基づくリズムといったようなものは、記憶つまり民族的記憶のなかに埋め込まれていくと思うのです。だからそれは必ず生き延びていくし、そういうものから例えば文化としての一つの音楽が残ることで、音楽以外の文化もそこに収斂しながら保たれていく、そういう力が実はあるのだと僕は楽観しているのです。

フフバートル 内モンゴルの文化のことで私も楽観的に思っているのは、遊牧地などの空洞化が進んで、モンゴルの伝統文化が崩壊していくという危機はあつても、一方では町に入ってきたモンゴルの若者たちが漢族の都会文化を取り入れた町のモンゴル文化というものを築き上げていくのではないかと思えます。実際に最近フフホトではモンゴル人の溜まり場が増えて、モンゴル青年たちのロックバンドなどはオンラインバートルの雰囲気漂わせてくれます。最近の田舎から出てきたモンゴル青年たちにとっては、漢語をきれいに話せることだけが誇りでな

く、モンゴル国のことばも人気があります。もちろん、日本語や英語などに対する関心も高いです。

最近、内モンゴルの若い人たちが中国で立ちあげたホームページにアクセスして、その議論の内容や発言の大胆さには驚きました。ネット上の共通語について「数千とも一万ともいう数のモンゴル人が日本にいる。それに日本に留学したところのある人や日本語ができるモンゴル人の数はもつとふくらむ。日本語で書くのではないか」と中国語で書いてありました。それは、漢語で書くことに対する反感とネット上でモンゴル文字が自由に使えないことによるいらだちを意味するかもしれないが、時代の変化を深く感じました。

このように、内モンゴルのモンゴル文化は一方的に漢化していくのではなく、モンゴル近代文化の「仕入先」としてオンラインバートル、またはモンゴル国をもっているということもあつて、モンゴル民族の伝統文化と中国の町の文化、そして、日本など外国の文化も取り入れた

内モンゴルのモンゴル人独特の文化が作り上げられていくのではないかと思えます。最近では田舎からの年寄りたちが都会や町でその子孫たちと同居できるようになっているので、モンゴル人の若い世代の漢語への同化には少しでも歯止めをかけることになるのではないかと思えます。また、電話が普及したことも民族語の維持に積極的な役割を果たしています。今はフフホトなどではモンゴル料理が漢族の間でもたいへん人気を集めています。

田舎での伝統生活文化の崩壊が町のモンゴル文化を充実させているように思われます。

中見 前にもふれましたが、フフホトの町でモンゴル語は昔にくらべれば、かなりつかわれるようになったのではないのでしょうか。モンゴル語を使っている人口は減っていますが。

高 確かにそのようです。去年の夏ですが、加々美先生と一緒に「内蒙古蒙古学研究中心」(内モンゴル大学モンゴル学研究センター)を訪問しました。その

「蒙古学研究中心」は恐らく日本のCOEと同じレベルでしょう。つまり国家重点プロジェクトとして設けられた研究機構なのです。内モンゴル大学のキャンパスや図書館や売店などいたるところでモンゴル語をよく耳にしました。教職員の寄宿舎のところに設けてあるスーパーへ買い物によく行きましたが、そのスーパーを開いているモンゴル人の若い人たちの、モンゴル語と漢語を用いて客に対応していた雰囲気はびっくりさせられました。

彼らが操っているモンゴル語を聴くと、すぐにあの奥地の牧畜民のことを思い出し、一種の親近感がわいてきました。私のモンゴル語はフフバートル先生に遥かに及ばず、一種の言語的モンゴル・コンプレックスを持っています。私にとつては、草原地域で耳にしたモンゴル語と都会にある内モンゴル大学で耳にしたモンゴル語は、たとえ方言の差があってもそれは空間を越える特別な存在を意味します。「空間」そのものがたとえなんらかの形で空洞化されていても、歴史的記憶

や言語は時間と空間を越える存在として維持しうるものだと思います。これも私の「アイデンティティ」に対して一貫した楽観的な主張に関わりますが、加々美先生はそう思いませんか。

加々美 思いますよ。内モンゴル大学の中もモンゴル語が圧倒的で、座談会をやったときも先生方はみなモンゴル語を話しました。僕だけはモンゴル語ができないから、しかたなく漢語でしゃべりましたけれど、答えるのもみなモンゴル語を使っていましたね。お互いに会話する

ときも全部モンゴル語でした。フフバートル 海外のモンゴル学研究者のほとんどがモンゴル語ができるから、それが中国のモンゴル史学会に与えた刺激は強いと思います。

加々美 学問分野だけでもそういう現象が起きていることは素晴らしいと思います。

中見 かつて一九三〇年代でしたか、リゲティというハンガリーのモンゴル学者は、モンゴル民族の将来に非常に悲観的なことを書いておりました。しかし、現

実はそう悲観的になる必要はない。しかしそう楽観もできない、それぞれの固有の伝統的な文化は重要です。

だからといって何でもかんでも守る必要はないのです。次の世代へと継承すべきものは何かと、これは日本の問題でもあるでしょう。確固たる日本文化というようなものがあってそれを保存するとうものではなくて、沖縄には沖縄の文化があるし、地方には地方、名古屋には名古屋の文化があつていいと思います。さらに新たに創造する地域文化というのは当然あつていいわけでしょう。その中には漢人だつて入れてあげなくては、だめだと思えます。排他的でないことを期待しますね。排他性をなくさない限りはおそらく世にいう民族紛争というのは絶対なくならないわけです。あらゆる伝統的な文化、伝統といつても、以外にふたを開けてみると、そんなに昔からの伝統ではないものなんていっぱいあるわけです。だから新たな文化をどんどん創造する力が多いほど、活力があるといえるでしょう。

前提に区域の民族自治というものがあるとするならば、やはりそこでは残すべき物を持つていると同時に新たな文化を創造していく活力がなければ、次の時代に伝えることは無理があるでしょう。きわめて抽象論ですけれどもね。

加々美 僕は今言われたような活力が絶対生き残ると思えますよ。今日は貴重なお話を本当にどうもありがとうございます。ずいぶんいろんな啓発をうけました。

高 まだまだ問題はたくさんあり、時間ということでも話を続けられないことをとても残念に思います。本日はこれをもちまして座談会を終了させていただきました。大変貴重なお話を聞かせていただきまして、編集部を代表して心から感謝しています。ありがとうございます。今後ともご協力をいただくよう心からお願ひ申しあげます。

(岡村慈恵「テープ起こし、高明潔」編集)